

ホメロスに於ける $\Lambda\text{H}\Theta\text{E}\text{I}\text{A}$

國方榮二

一

真実あるいは真理をあらわすギリシア語は、 $\alpha\lambda\eta\theta\epsilon\iota\alpha$ (叙事詩では $\alpha\lambda\eta\theta\epsilon\iota\eta$) であるが、周知のように M. ハイデッガーの語源解釈によれば、 $\alpha\lambda\eta\theta\epsilon\iota\alpha$ は、 $\alpha-\lambda\eta\theta\epsilon\iota\alpha$ すなわち α privativum と $\lambda\eta\theta\epsilon\omega$ あるいは $\lambda\alpha\upsilon\delta\alpha-\nu\epsilon\alpha$ からなるとされる。ハイデッガー自身の説明では、「 $\alpha\pi\omicron\phi\alpha\nu\sigma\iota\varsigma$ としての $\lambda\acute{o}\gamma\omicron\varsigma$ の真であることは、 $\alpha\pi\omicron-\phi\alpha\iota\nu\epsilon\theta\alpha\iota$ という仕方¹に於ける $\alpha\lambda\eta\theta\epsilon\iota\epsilon\upsilon\sigma\iota\varsigma$ すること、つまり、あるものを——隠れていることから取り出して——その隠れなきことと(発見されてあること)に於いて見えるようにすることである。」(M. Heidegger, 1927, 219)¹とされる。このハイデッガーのものとして知られている解釈は、数十年遡ってドイツの文献学者クラッセン (Joh. Classen) あたりから始まっているようであるが、語源解釈を離れたハイデッガー自身の主張を度外視するならば、今日では一般の支持を得ていると言うことができる。これに対する反対意見は、フリートレンダー (P. Friedländer) によって表明されたけれども、一九六二年にでたハイチュ (E. Heitsch) の研究は、ホメロスからデモステネスまでの用例に於いて $\alpha\lambda\eta\theta\epsilon\iota\alpha$ は $\lambda\alpha\upsilon\delta\alpha\nu\epsilon\omega$ に属する語であることを検証したもので、

それによってフリートレンダーも後に自説を大幅に修正することを余儀なくされている。⁽³⁾この語源解釈は、古く遡ればおそらくセクストス・エンペイリコス(後二世紀)⁽⁴⁾やオリュンピオドロス(後六世紀)⁽⁵⁾に、あるいはヘシキオス(後五世紀頃)⁽⁶⁾や『エティモロギクム・グデアヌム』(後一一世紀頃)⁽⁷⁾や『エティモロギクム・マガヌム』(年代不祥)⁽⁸⁾といった古辞書に遡ると思われるが、今日では『初期ギリシア叙事詩辞典』(Lexikon des früh-griechischen Epos)で、 mette (H. J. Mette) が担当した *ἀληθεία* の項目に於いても、あるいはフリートレンダー以後にでた語源辞典やその他の研究でも、受け容れられているのである。⁽⁹⁾

けれども、この語源解釈から引き出される語そのものの意味については、かなり違った意見が行われている。(1) ハイチュによれば、ドイツ語の *Wahrheit* が判断の正しさを表しているのとは異なり、*ἀληθεία* は隠れなきこと (Unverborgenheit) として客体に帰属する。つまり、彼によると、真実を語るといふホメロスの表現は、世界のうちに隠れなきものとして現れているなにかを言葉でくり返すことであり、従って、隠れなきことは、自ら現れてくることによって隠れなきものとなっている対象の性質である (E. Heitsch, 1962, 31-32)。これは先の引用の中で、ハイデッガーが考えている意味とほぼ同じと言うことができる。他方、(2) mette によれば、*ἀληθεία* を語ることは、言表の対象が隠れなきままであるような仕方である (s. v. *ἀληθεία*)。つまり、対象はそれ自体からではなく、言表において隠れないものとなるのである。これはまさにハイデッガーが否定しようとした意味にはかならないであろう。ホメロスに於いて *ἀληθεία* がもつ可能な意味として、右に述べた二つの意味を含めて、フリートレンダーは次の三つを挙げている (P. Friedländer, 1964, 236)。すなわち、(1) あるものが現実的であること (Wirklichkeit)、(2) 言表や信念が正しくあること (Richtigkeit)、(3) 人格の誠実さ正直さの三つである。最後の意味に関しては、ホメロスに於ける用例が一箇所のみあるとされ、メ

ッテはこれを *Loci Dubii* に入れているが (s. v. ἀλθής) 、この点については後に述べたい。最初の二つの意味のうち、(1) はハイチュオおよびハイテッガーの解釈に、(2) はメッテの解釈に相当するであろう。この小論では、以上のような論争に留意しながらも、しかし一応それより距離をとって、とにかく先ずホメロスのテキストそのものに立ち返って、ἀλθήςの個々の用例について、できうる限り原文に即して検討していくようにしたいと思う。

二

ホメロスの中では、ἀλθήςあるいは ἀλθήςはただ一回の例外を除けば、常に「語る」という動詞と共に用いられている。用例は、『イリアス』で ἀλθήςが二例、形容詞の ἀλθήςが二例の合計四例である。『オデュッセイア』では ἀλθήςが七例、形容詞の ἀλθήςが七例の合計十四例ある。大抵 *caesura* の後に置かれるが、これも例外的にそうでないものがある。共に用いられる動詞は、*καταλέγειν* (七回) が最も多く、そして注目されるが、*μυθειάθαι* (五回) も多く用いられ、他に *ἀγορεύειν* (二回) 、*ἀποειπεῖν*、*ἐυνοεῖν*、*ειπεῖν* (各一回) がある。さて、ホメロスに於ける ἀλθήςおよび ἀλθήςの用例は、あわせて十八例あるわけであるが、このうち ἀλθήςを α + λθ — とする語源解釈を最も多く証拠だてていると思われるのは、『イリアス』第二三歌に於ける、パトロクロスのための葬礼競技の一場面である。戦車競争の賞が定められた後、競技者らが一列に並ぶと、

(1) 「アキレウスは、はるか遠くの平原にあるゴールを指さして、その傍らに、父君の身に随う、神にも似た

ポイニクスを審判者として置いた。それは、駆け具合を心に留とめ、真実を宣べるためであった (ὄσ μενεῖστο δροίμους καὶ ἀληθεῖην ἀποεῖποι)。(Ψ 358-361)

と言われている。このテキストで ἀληθεῖν が文字通り α + ληθ - (忘却のないこと) の意味で用いられているというのは、これと並べられている μενεῖσθαι が、心に留めること、記憶すること、言い換えれば「忘れない」ことを意味するからである (cf. Ψ 648 μεν αἰ μέρησαι…… οὐδέ σε ληθῶ)。

この箇所が、ハイデッガーおよびハイチュエが主張したような Unverborgenheit の意味の例としてしばしば引かれるのは (例えば、P. Friedlander, 1964, 236 参照)、¹⁰ μενで言われている真実が、ポイニクスが宣べる判定の正しさというよりは、誰が事実勝利を得たかということ、すなわち駆け具合の真実 (ἀληθεῖν δροίμω) であるように思われるからであろう。しかし、もともとギリシア語では、例えば *ιστορία* は探求と共に、探求される事柄 (歴史) を意味することができるし、*λόγος* は言葉のみならず、語られる内容を意味することができるように、対象の側の性質か言表の側の性質かというような区別がはじめから明確に意識されていたかのごとく、これをテキストから一義的に決定することは困難であろう。¹¹ μενに、*λαβάνω* は、*Verborgenheit* という訳語などから連想されるような、なにかを覆うことによる知覚の遮断や、あるいは一般になにかが隠された状態を意味するものではない。語の意味は、文字通り「注意を免れる」ことであって、例えば、メリオネスの武者ぶりが他のギリシア人には気づかれなくても、ひとりイドメネウスには知られている (*λήθω μαρτύλιος, σε δέ εἰδέναι, N 273*) という例で言うならば、メリオネスの行為はイドメネウスを除く他のギリシア人にとって覆われているというのではなく、知覚されてはいても、正しく目が向けられていないということである。¹²

ところで、『イリアス』第二二歌に於いて、*ἀληθής* が唯一「語る」という動詞と共に用いられていない例が

ある。原文に多少の疑義が生じているけれども、同じような用例がヘシオドスに見られることから、ἀληθήςと写本通り読むのが、おそらく正しいであろう。¹²⁾

(2) 『手間代稼ぎの、注意深い (ἀληθής) 女が天秤をかけるように、すなわち、あたじけなくも子供らのために労賃を稼ごうと、分銅と羊毛を両の手に等しい重さにしながら持ち上げるように、そのように両軍は持ち合っていた。』(M 433-435)

人格の「誠実さ正直さ」の例として、フリートレンダーが挙げているのはこの箇所である。けれども、このように解することは文脈からして不可能である。女が羊毛を量るのは、明らかに良心からでなく、正確な重さを知ることによって十分な報酬を受けるためである。すなわち、女の仕事に対する忠実さは、必ずしも善性によるものではない。ἀληθήςは「誠実さ正直さ」ではなく、むしろ先の例と同様に、ここでも「(自分の仕事を) 忘れない」という意味で用いられているように思われる。¹³⁾ M 433の参考箇所として、よく引かれるのにヘシオドス『神統記』の中の、ネレウスについて述べた一節がある。ポントス(海)は、最初の子として、「嘘をつかず真実なる」(ἀψευδέα καὶ ἀληθέα) ネレウスを産む(233)。このἀληθήςを、注釈家はここでも「誠実な (truthful)」という意味に解している。¹⁴⁾ しかし、直前に言及されているエリス(争い)の子らのうち、偽り (ψευδέα) と忘却 (Ἀθήνη) が、これら二つのネレウスの性質にそれぞれ対応していること(229, 227)、またこれに続いて「正しい宣告を忘れない」(οὐδέ θεμιστῶν Ἀθήετα) という言葉(235-236) が語られることを考えれば、ἀληθήςは文字通り「忘れないこと」の意味で用いられているのが自然なのである。

右の二つの用例で、もし「忘れない」というそのもともとの意味が保たれていると考えられるのであれば、ἀληθήςは語る者の記憶に関わる事柄としてとらえられることになるであろう。あるいは、スネル (B. Snell,

1978, 94)の言うように、ある認識の連続性の中であって、なにひとつ *ἀληθῆ* にゆだねないことが、*ἀληθειῆ* である条件となるだろう。しかし、もしそうであるならば、*ἀληθειῆ* が、なにかが偽りでなく本当にそうであったというような客観的な真を表すことは、その原初的意味とは関わりのないことなのであるか。あるいは、*ψεῦδος* (嘘、偽り) は *ἀληθειῆ* と異なる語根に属するけれども、*ἀ-ψεῦδής* なものとしての、すなわち *ψεῦδος* の反対概念としての *ἀληθειῆ* は、本来の意味から離れたものとして考えられるのであるか、ということが問題となるであろう。次に、このことについて考えてみたい。

『オデュッセイア』第一四歌で、接待を受けたオデュッセウスが主人の消息について心当りを話せるかも知れないと申し出ると、豚飼エウマイオスは、

(3) 「流れ者たちは、もてなしを受けたいばかりに、でたらめな嘘をつくもので (*ψεῦδοι*)、¹⁵ 真実を語る (*ἀληθεῖα μυθήσασθαι*) 気持ちはい少しもなごのだ。」 (ε 124-125)

と言って、断っている。この用例は、*ἀληθεῖα μυθήσασθαι* が *ψεῦδοι* と反意的に用いられ、偽りに対する真を表している点で、先の例と異なると考えられている。同様に、第一三歌では、(4) オデュッセウスが、女神アテネに自分の身の上について真実を語らず (*οὐδ' ἄλλοτις ἀληθεῖα εἶπε*)、嘘をついている例がある (ν 254)。*ψεῦδος* とは、真実について知っているにもかかわらず、故意に語られる嘘のことである。¹⁵

しかも、この真実と嘘の対置は、*ἀληθῆ* 以外の語でも見られることが注意されねばならない。『オデュッセイア』第三歌で、女神アテネが、オデュッセウスの消息についてネストルに尋ねることを、テレマコスに勧めくんだりがあるが、そこでは「真実を語るように (*ὄπως ἠγέεσθαι εἶπῆ*)、¹⁶ そなた自身で頼みなさい。彼が嘘を言うことはいふであらう (*ψεῦδος δοῦκε εἶπεε*)」(γ 19) と別の語が用いられている。*ἠγέεσθαι* は、

否定的意味の接頭辞 *ψευ-* と語根 *αμαρτ-* (*αμαρτανε* 誤る) からなる形容詞で、「誤りのない」というその語義から考えても、*ψευδος* と反対的な意味をもっている。さらに、ホメロスでは真実を表す語として、他に *ετυμος* がある。*ετυμος* には、これに似た語形として、*ετος*、*ετειος*、*ετηρος*、*ετητυμος* があり(他に、エテオクレスという人名に現れる)、これらは共に動詞 *ετιναι* (ある) に由来している。スネルやクリッシャーによれば、*αληθης* が人間の記憶の状態に基づいているという点で、主観的な要素が強いのに比して、*ετυμος* は客観的な正しさを意味するのに用いられるという (B. Snell, 1978, 95-100, 104; T. Krischer, 1965, 166-167)。例えば、「アンティロコスに対して、「われわれアカイア人は、おまえを利発者と言ったのは真実でなかった (*οὐ…ετυμος*)」(ψ 440) という例や、「予言者カルカスが「真実のこと (*ετειον*) を予言しているのか否か」(B 300) という例で、真実とは客観的な正しさと同じ意味である。従って、その語義からしても、*ετυμος* は *ψευδος* と容易に対立する。用例を挙げれば、『イリアス』第一〇歌に於いて、「わたしは偽りを言っているのであるのか、それとも真実のことを言っているのであるのか (*ψευσομαι, η̄ ετυμων επει*)」(K 534) とどうネストルの自問の言葉は、*ετυμος* によって語られているのである。

けれども、『イリアス』第六歌で、召し使いの女に対して、「さあ真実のことを語ってくれ (*ψημεπρεα μθησασθε*)。腕白きアンドロマケは、館よりいずこに出かけたのか」(Z 376) と主人ヘクトルが問い質す場面があるが、召し使いの女がアンドロマケの居所について話していくその最初の言葉は、

(5) 「ヘクトル様、あなたが真実のことを語れ (*αληθεα μθησασθα*) と命じておられますので」(Z 382)

で始められている。さらには、『オデュッセイア』第四歌に於ける求婚者たちの会話の中には、「わたしに真実の

ことを語ってくれ (*νημερέεις·εὐκατὲ*)」 (*δ* 642) と述べたすぐ三行あとに、今度は、「わたしに次のことについても、真実のことを語ってくれ (*ἀγρόπευσον ἐτήριον*)」 (645) という別の表現が見られる。以上の例から分かるように、これらの語は、実際の用いられ方に於いては、ほとんど同じ意味で使用されているのである。そして、そのうちの語を選ぶかは韻律上の問題 (*metri gratia*) の域を超えないように思われる。¹⁶⁾

たしかに、これらの語が、これまでの用例の中で實際上ほとんど同じ意味で用いられ、そのいずれかを韻律上の理由によって置き換えうるということは、それらが同義であるということでは無論ない。なぜなら、異なる語を使用することによって、付帯的な意味や含蓄を与えることは可能であろうし、まして、言葉の語源的な意味あいが意識されているのであれば、なおさら効果が期待されうるであろうからである。けれども、われわれがテクストから、一つの根本概念を探り当て、他の意味を派生的なものあるいは別の語によって類同化されたものとなすことは、実際上は困難であるように思われる。¹⁷⁾ *ἀληθείη* は、既にホメロスに於いて、忘れないことという意味のほかに、*πίστευσις* であることの意味で用いられており、どちらが先であるかについて決定する材料はないようである。同様に、真であると言われるのは、対象の側の性質としてであるのか、それとも言表の側の性質としてであるかという問題も、一義的に決められるものではなく、実際には、その両方について使われていると言うほかはないであろう。

ところで、これまで挙げた例から、ホメロスの中で $\alpha\lambda\theta\epsilon\iota\alpha$ が現れるのは、多くの場合、ある特定の事実を報告するという設定の下に於いてであるということがある。すなわち最初の (1) の例で言えば、勝敗の事実 (A) が、ポイニクスという報告者 (B) を通じて、その事実に関わりをもっているアキレウスを含むギリシア人 (C) に報告される、という三極の構造になっており、(A) から (C) への伝達経路に歪曲がなければ、それが $\alpha\lambda\theta\epsilon\iota\alpha$ であるということである。同じような例として、第二四歌には、老王プリアモス (C) が、アルゴス殺しの神ヘルメス (B) に息子ヘクトルの死体の様子 (A) について尋ねるくだりがあり、

(6) 「*xu*あ、私にあらゆる真実を話して下さい ($\pi\acute{\alpha}\sigma\sigma\alpha\upsilon\ \alpha\lambda\theta\epsilon\iota\gamma\upsilon\ \kappa\alpha\tau\acute{\alpha}\lambda\epsilon\phi\omicron\upsilon$)。私の息子はまだ船の傍らに置かれてあるのか、それともはやアキレウスが手足をばらばらにして、自分の犬らに投げてやったのか」 (Ω 407-409)

と言われている。われわれは、以下の考察に於いて、 $\alpha\lambda\theta\epsilon\iota\alpha$ についての語源解釈を論じるよりも、真実という言葉がどのような設定の下にどのような事柄について使われているかということに、むしろ注目してゆきたいと思う。

ホメロスに於ける $\alpha\lambda\theta\epsilon\iota\alpha$ の使用範囲は、後に見られるように必ずしもこのような目撃者の報告にのみ限られるわけではないが、¹⁸⁾しかしその多くの用例によく適合すると言うことができるであろう。そして、われわれはそのような用例を、『オデュッセイア』の中にいくつも見いだすことができる。オデュッセウスが長い漂流の末にパイエケスの国に着いた後、王妃アレテから求められて、漂流譚を語った最後に、

(7) 「いのように、辛い気持ちではあるが、あなたに真実をお話しました (ἀληθειῆν κατέλεξα)。」 (7297)

と締めくくっている。あるいは、いわゆる冥界行に於いて、アキレウスの亡霊が子と父の消息を尋ねるのに答え、オデュッセウスは

(8) 「高貴なる父上ベレウスについては、私は何も聞いていないが、あなたの愛しい子ネオプトレモスについては、あなたが命ずる通り、あらゆる真実をお話しましょう (πάσαν ἀληθειῆν μὴ ὄμοιαι)。」 (λ 505-507)

と言っている。これらの用例からも知られるように、ホメロスに於いて ἀληθειῆν は、多くの場合、報告者によって伝えられる「事実」を表す。すなわち、ものの全体を捉えるような普遍的な真実あるいは真理を語るといではなく、語られるのは個々の出来事や事実である。しかもその事実についてひとは、報告者を通じてという間接的な仕方ではしか知ることができない。先に引用された(6)の例で言えば、プリアモスは館より離れてあるギリシア人の船で起きていることは、アキレウスの侍者を称するヘルメスに、真実を質すほかはないし、(8)の例にいたっては、冥界にいるアキレウスにとっては、自分の目で真実を確かめることはまったく不可能な事である。ἀληθειῆν⁽⁹⁾の使用が、このように(A)から(B)を通じて(C)への伝達経路に隔たりがある場合に多く見られることは、ホメロスの、とりわけ『オデュッセイア』の著しい特色をなしていると言うことができるであろう。同様な例を労を厭わずに列挙していくと、第三歌には、テレマコス(C)が、父オデュッセウスの消息を知るためにピュロスを訪れた折に、(9) ネストル(B)にアガメムノン殺害(A)について尋ね (ἀληθῆς εὐρισπες γ 247)。(10) ネストルも真実を語る約束をする (ἀληθῆα πάντ' ἀγορεύσω γ 254) くだりが

ある。また、第一六歌では、(11) 豚飼エウマイオス (B) が、テレマコス (C) にオデュッセウスの素性 (A) について (*ἀληθεῖα πᾶντ' ἀγορεύσω* π 61) 'あるいは' (12) オデュッセウス (B) が、再会した息子テレマコス (C) に自分のイタケ帰国のありさま (A) について真実を語っているし (*ἀληθεῖν καταλέξω* π 226) '第一七歌では' (13) テレコマス (B) が、母ペネロペイア (C) に父オデュッセウスの消息 (A) について (*ἀληθεῖν καταλέξω* π 108) 'あるいは' (14) タケダイモン王メネラオス (C) にイタケの情況 (A) について真実を語っており (*πᾶσαν ἀληθεῖν κατέλεξα* π 122) '第二二歌では' (15) 乳母エウリュクレイア (B) が、主人オデュッセウス (C) に留守中の屋敷に於ける女中達の行状 (A) について真実を語っている (*ἀληθεῖν καταλέξω* χ 420) 例がある。

われわれは、報告者が真実を語るといふ場面に於いて、しばしば *καταλέγειν* という表現が現れることに気づくであろう。このような場面において、*καταλέγειν* という語の持つ意味を知るのによい例として、『オデュッセイア』の第五歌で、神々の会議に於いてアテネが神々に向かって、オデュッセウスの「多くの心労を *λέγειν* した」(ε 5) と言われ、他方、『イリアス』第九歌では、城市に火がつけられようとする時にクレオパトレが夫メレアグロスに向かって、町を滅ぼされた人々が受ける「あらゆる心労を *καταλέγειν* した」(I 591) と言われるよく似た文脈がある。ともに同じような表現が見られるけれども、クリッシヤーが指摘しているように、テキストで *λέγειν* が *φοῦλ' (α)* と結びつけられ、他方、*καταλέγειν* が *ἄπαντα* と結びつけられているのは偶然ではない。ε 5 の場合には、オデュッセウス帰国の許可を認めさせるだけの理由をアテネは神々に訴えれば充分で、オデュッセウスが経験した出来事のすべてを語るまでもないのに対し、I 591 の例では、クレオパトレは、夫の怒りを収め城市を守らせるためには、征服された城市が蒙る一切の事柄を数え上げる必要が

あつたと考えられる (cf. T. Krischer, 1971, 155-156)。「ちあそれでは私に正確に語ってくれ」(ἀλλ' ἄγε μοι... ἀτροκῆως κατὰ λέξου) というしばしば見られる表現が明らかに示しているように、κατὰ λέξουは語られる対象を逐一あます所なく、正確に描写するという場面で多く用いられ、専ら情報を与える際に適用される。そういう意味に於いて、ἀληθείηはκατὰ λέξουとよく結びつきうると言うことができよう (cf. T. Krischer, 1965, 168-169)。

しかし、ホメロスでのἀληθείηの用例の中には、目撃者が過去の出来事を報告するのとは明らかに異なる例がある。『オデュッセイア』第一七歌の冒頭で、テレマコスが、乞食を装ったオデュッセウスのために、町で施し物を受けられるように配慮してはやるが、しかし自分の客人として迎えることはできないと言って、

(16) 「もし客人がこれにひどく腹を立てるのであれば、客人にとってよからぬことになるだろう」(ἐσοεταί)。

というのも、私は真実のことを語る(ἀληθῆα μὴ ῥαοθαί)のが好きなのだ。(p. 14-15)と脅す場面がある。さらに、第一八歌では、口汚く罵られたオデュッセウスは、女中たちがいまだんなことを言っているのか、テレマコスに早速言うことにしよう(εἰπέω)と威嚇すると、

(17) 「オデュッセウスが真実のことを語っている(ἀληθῆα μὴ ῥαοθαί)と思ったので」(σ. 342)

女中たちはあたふたと館に逃げ込んだ、と言われている。これらの例で、ἀληθῆαと呼ばれるのは過去にではなく、将来に属する事柄である。従って、報告者の伝達場面のみにἀληθείηの用法を局限して語ることは、誤りとしなければならないだろう。右の二例は脅し威嚇する場合であるが、次に引用する例は、今度は話者が相手に対し報酬を約束する場合である。オデュッセウスは、忠実な召し使いたちにこう約束している。

(18) 「お前たち二人に真実を語ろう(ἀληθείην κατὰ λέξου)。もし神が求婚者たちを私の下に屈服させて

くださるならば、二人ともに妻を娶らせよう (*ἀξιομαί*)。また、財産と我家近くに建てられた家とを贈ろう (*ἄρασω*)。(φ 212-215)

この例でも、真実は既に起きた事柄ではなく、将来に実行を約束されたものを指している。しかしながら、*ἀληθειῆ*はいわゆる既成の真実の意味に限られないけれども、この将来に実行されるであろうことが、個別的な事柄である点は、これまでの例となんら変わるところはないとも言えるだろう。それは、いわば将来の、予想的な事実とも言えるべきものである。

いづれにしても、目撃者の報告場面の中であれ、将来について語る場面であれ、個々の出来事や事実についての記述に用いられるということが、ホメロスに於ける *ἀληθειῆ* の用いられ方の特徴と言いうことができよう。

四

ホメロスの作品中で、最も正確な報告を与えることができると考えられている人間は、歌人 (*ᾄδων*) である。『オデュッセイア』第八歌で、オデュッセウスは歌人の歌を

「デモドコスよ、すべての死すべき人間のうちで、はるかに君を私は讃える。ゼウスの子ムーサかアポロンが君に教えたのだ。なぜなら、実に見事に、君はアカイア人たちの運命を、すなわちアカイア人たちが成し遂げたこと、身に受けたこと、苦しんだことを歌っているからだ。さながら君自身がその場にいたか、その場にいた他の者から聞いたかのようにであった。(ὡς τὲ ποῦ ἢ αὐτὸς ἤκουσεν ἢ ἀλλοῦ ἀκούσας)」
(θ 487-491)

と言って、ほめ讃えている。デモドコスがムーサに寵愛され歌を授けられた代わりに視力を奪われた盲目の歌人であるが(63-64)、オデュッセウスの讃辞の言葉から、彼の歌の見事さは、とりわけその記憶の生々しさのうちに見いだされていることがわかる。すなわち、デモドコスの歌は、その場に居あわせたオデュッセウスの目からも、出来事を正確に描写するものであると思われたからこそ、ほめ讃えられているのである。スネルの有名な言葉である、「現場にいることの多さが、すなわち知の多さ」(B. Snell, 1980⁵, 128)ということがここに当てはまるであろう。そして、その知の確かさは、歌人がムーサから直接歌を授けられることによって保証される。このことは、『イリアス』第二歌のいわゆる軍船のカタログの冒頭をなす有名な一節に於いて、明らかに示されている。

「オリュンポスに宮居しますムーサたちよ、私に語ってください。あなたがたは、神であり、その場に居あわせ、すべてのことを知っているが(παρέρει, ἴστέ τε πάντα)、他方、私たち(人間)²⁰は、ただ噂を聞くだけで、なにひとつ知ることはないのだから。誰がダナイ人たちの指揮官や領主であったかを語ってください。」(B 484-487)

ἀληθείη は、これまでの用例では、いつもオデュッセウスとか、ネレウスとか、あるいは乳母とかいった人物が語る場面のみ現れているが、右の引用によるならば、これらの人々がもたらす報告は結局は「噂」(κλέος)でしかなく、不正確さを免れることはできないであろう。他方、真実を知ろうとするとき、歌人はつねにムーサに訴える(例えば、A 218, H 508, II 112)。ムーサから得られる知は、先に述べた報告場面に見られるような間接知ではなくて、むしろもっと直接的なものであると言える。つまり、ムーサはあらゆる出来事の現場にいることによって(omnipresence)、歌われることの真実性を保証しているのである。このような意

味で、歌人は *ἀληθείη* とより密接により直接的に結びついているのである。

デモドコスが、人を楽しませるべく (*τέρπειν*) 神から歌を与えられたと言われるように (θ 45)、また、豚飼エウマイオスが、歌人を歌によって楽しませる (*τέρπειν*) 者と呼んでいるように (ρ 385)、ホメロスに於いてふつう歌人が担っている役割は、ムーサから与えられた歌によって聴衆を喜ばせることにあると考えられている。そして、聴衆を喜ばせることのない歌は、歌としての資格がないと言えるであろう。かくして、アルキノオスはオデュッセウスの涙を見て、デモドコスに歌を中断させたし (θ 538)、ペネロペイアは、ペミオスの歌が聞くには辛い帰国物語に触れたために、歌をやめさせたのである (α 340)。けれども、ホメロスに於いて歌人がもつ役割はこの点にのみ尽きるわけではない。『オデュッセイア』第二二歌で、セイレンたちが人々を魅惑する (*βέλγυνον*) 歌を歌っている場面がある。「魅惑」(*βέλγεις*) を与えることは、歌人たる者の条件である (μ 40,44)²¹。セイレンは、言わば最も神秘的なタイプの歌人であると言うことができよう。彼女らの歌を聞く者は、(a) 心楽しむと共に (*εὐφραίνεσθαι*)、(b) 以前に増した知識を得て (*καί κλειοναείδων*) 帰って行くと言われている。その理由は、セイレンたちがトロイアの地で人々が経験した苦難も、また地上で起きることもごとく知っているからである (α 188-191) とされる。死すべきものである歌人にとつても、その役割は、(a) 聞く者を楽しませるのみならず、(b) 真実を語ることにもあると言うことができる。さらに、『オデュッセイア』第九歌から第一一歌にかけてオデュッセウスが語っている長い物語もまた、同じような例と見なされるであろう。聴衆のひとりアルキノオスは、オデュッセウスを歌人に喩えながら、

「オデュッセウスよ、そなたを見て、人を欺く者とも山師とも私たちは思わぬ。黒き大地は、ひとが確かめることさえできぬような出所より、偽り (*ψεύδεια*) をこねあげる人間たちを、数多く世に撒き散ら

し育んでいるが、そのような者とは思わぬ。むしろ、そなたには言葉の優美さがあり、すぐれた才覚がある。歌人が語るごとく (*as or doctos*)、そなたはすべてのアルゴス人とそなた自身の痛ましい苦難の物語を巧みに語った。」(λ 363-369)

と言って、讚美している。「歌人が語るごとく」と言われるのは、物語が聴衆を喜ばせる優美さ (*νοσην*) を有していると同時に、真実性をもっていることにほかならず、両者をもつことが、歌人としての理想と考えられているのである。⁶³⁾

かくして、*αληθεια* は歌人と密接に結びついていると言うことができる。歌人が普通人と異なり、いわゆるエピペニアを通じ特別な力を得て、真実を語る者であるということは、ギリシア人に一般に認められており、ホメロス以後の芸術形式に於いて受け継がれた考え方である。しかし、ホメロスでは、聴衆にもたらされる *αληθεια* の内容そのものに関して、先の報告者が伝える場合と本質的な違いはない。既に引用された、「誰がダナオイ人たちの指揮官や領主であったか」(B 487) という例や、あるいは、「誰が最初にアガメムノンに立ち向かったのか」(A 219)、「どのようにして最初火がアカイア人たちの船に落ちたのか」(D 113) などが例示しているように、歌人がムーサから求めるものは、常に過去に起こったことについての真実であるということが分かる。従って、間接的であるとないとを別とすれば、聴衆にもたらされるものは、共に個別的な出来事についての記憶なのである。

このような点では、ホメロスはヘシオドスなどとは明らかに異なっている。この点について、次に確認してみたい。ヘシオドス『神統記』の序歌の、ヘシオドスがムーサによって歌を吹き込まれる部分の中で、ムーサたちはこう語りかけている。

「私たちは、たくさんの真実に似た偽り (*ψευδῆα ποτῆα… ἐτυμολογεῖν ὁμοία*) を話すこともできる。けれども、私たちは、その気になれば、真実 (*ἀληθῆα*) を宣べることがもできるのだ。」 (*Theog.* 27-28)

この一節は、しかし、問題の多い箇所であり、一般には、ヘシオドスが自らの詩を、ホメロスあるいは他の叙事詩人の作る虚構の世界と対置させていると解釈されている。²⁴⁾つまり、ここでムーサは、真実に見えるが実はそうでないような偽り (*ψευδῆα ἐτυμολογεῖν ὁμοία*) を捏造する——これがホメロスの世界である——のではなく、真実を語るようにと、ヘシオドスに指図を与えていると解される。真実を語るということに重い意味を持たせることによって、ヘシオドスをパルメニデス (*Fr. I, 29, DK 28*) に連絡させる解釈を、哲学的解釈と呼ぶとすれば、この解釈はいま述べたような真実と偽りの峻別に基づいていると言うことができる。

けれども、ホメロスに於いて歌人がムーサを通じて語るものが真実であることは、既に見られた通りである。さらに真実に似た偽りは、ホメロスでは歌人ではなく、オデュッセウスに帰せられていることが注意されねばならないだろう。すなわち、『神統記』v. 27は、『オデュッセイア』v. 203に対応する。ホメロスでは、オデュッセウスが作り話を好んだことはよく知られているところであり (*cf. v. 294-295*)、長い作り話をベネロペイアに語り聞かせた後に、オデュッセウスは「たくさんの真実に似た偽りを語った」 (*v. 203*) と言われている。事実でないことを、もっともらしく語ったという意味である。従って、v. 27とv. 28は、それぞれホメロスとヘシオドスを対照的に語るものではなく、むしろ、例えばオデュッセウスの語り方に見られるような二側面が、ヘシオドスではムーサに帰されているのである。つまり、ムーサたちがヘシオドスに物語り告げ知らせようとしているのは、真実に似た(もっともらしい)虚偽と真実そのものであり、そして、それらが彼女らの知の全体を形作っているということ、言い換えれば、ムーサは時にもっともらしい虚偽を語り、時に真実を語るということ

であるように思われる。

ここで、ヘシオドスについて詳論する余裕はないけれども、われわれに必要な事は、テキストから遊離させて哲学的に論ずることではなく、文脈に即してヘシオドスが語ろうとした意図を読み取ることであろう。ところで、右のヘシオドスの詩句でいわれる真実および真実に似たものは、神の声となつてヘシオドスに吹き込まれるとされる。それは、ムーサが続いて語っているように、*τὰ τ' ἐσομένεα κρὸ τ' ἐόντα* (32) 'すなわち、将来にあるであろうもの、過去にあつたものについての讚歌である。しかし、それは人間の歴史に於いて過去に起つた出来事(歴史記述)や、将来起きることが予見される出来事(予言)について語ることではない。なぜなら、将来について讀めることは不可能と考えなければならぬからである。²⁵むしろ、次行で、ムーサたちが、永遠にある (*ἀείαν ἐόντων*) 淨福なるもの達の種族を讚美することを命じている (33) ことから分かるように、人間が過去に為したことについてでも、将来に為すであろうことについてでもなく、*τὰ αἰείαν ἐόντων* すなわち永遠にある神々について、その誕生と闘いを語ることなのである。これに比して、ホメロスに於いて歌人が歌っている事柄は、既に述べたように、あくまで人間世界に於ける出来事についてである点に、違いが見られるのである。

真実という言葉の、常識的な、*nicht-philosophisch* な使われ方のみがなされていることが、ホメロス(およびホメロス讚歌を含む)²⁶に於ける特徴であり、同時に、ホメロス以後の使用に於いても、このホメロ斯的な用法はその底辺をなしていると言うことができるであらう。よく知られているように、真理概念の一般化は、ヘシオドスにいたつて始めて見られる。けれども、そのことが、しばしば主張されるような、*philosophisch* な使用とということであるのかどうかは、なお問われなければならない問題である。

[註]

- (1) 文献の指示は、本稿末尾の参照文献表に従い、著者名、発表年、頁数を記す。
- (2) 'Wahr ist den Griechen das Unverhüllte, ἀ-ληθές (von λήθω, λανθάνω), und die Wahrheit, ἀλήθεια kommt den Dingen und Worten zu, in so fern sie sich unserer Einsicht nicht entziehen.' (Joh. Classen, 1851 E. Heitsch, 1962, 24 ㉔ ㉕ ㉖ ㉗)° cf. H. Ebering, 1885, s. v. ἀ-ληθειη; E. Boisacq, 1923, s. v. ἀληθής
- (3) P. Friedländer, 1954², 233-248; 1964³ 233-242; E. Heitsch, 1962, 24-33
- (4) Sextus Empiricus, Adversus Dogmaticos, ii, 8 ἂν ἀληθῆ μὲν εἶναι τὰ κοινῶς πᾶσι φανόμενα, ψευδῆ δὲ τὰ μὴ τοιαῦτα ὄβευ καὶ ἀληθῆς φερωμένως εἰρησθῆαι τὸ μὴ λήθου τῆν κοινὴν γνώμην. (感覚に現れているものうち、すべての人に共通に現れているものが真なるものであり、他方そうでないものは偽りのものである。従ってまた、語源を遡って言うならば、共通な認識からの注意を免れつゝなるものがアレーテスなのである。)
- (5) Olympiodorus in Platonis Phaedonem Commentaria, 156, 15 (Norvin) ἡ ἀλήθεια τὸ ὄνομα θηλοῖ ἀληθῆς ἐκβολήν εἶναι τῆν ἐπιστήμην. (アレーテイアと云ふ名前が、知識とは忘却の排除である)トを明らかにしよ(58°)
- (6) Hesychius s. v. ἀληθῆα ἀψευδῆ καὶ τὰ < μὴ > ἐκλανθανόμενα. s. v. ἀληθῆς: … ἡ μνήμων, κατὰ στέφανον τῆς ἀληθῆς. (アレーテア=偽りなきもの、忘却されるもの。アレーテス=忘却の欠如という意味でのもの覚えのよき)

- (7) Etymologicum Gudianum, *παρὰ τὸ ἀγθω*.
- (8) Etymologicum Magnum, *τὸ μὴ ἀγθ ὑποπίπτου*.
- (9) H. Frisk, 1954, 71; W. Luther, 1966, 34 f.; P. Chantraine, 1968, s. v. *λαβάνω*; A. W. H. Adkins, 1972, 545v.
- (10) cf. W. Luther, 1966, 36–38
- (11) 同様に、世に行われてゐる裁きは、ひとりゼウスの目には見落される(οὐδέ ἐ λήθει)、『正しく知られてゐる (Hesiodos, *Erga*, 267–269)』。cf. T. Krischer, 1965, 162–163
- (12) 別の読み方として ἀλήτες (*vagrant*) があるが、一般に支持されてゐない。
- (13) W. Leaf, 1900–1902?, I. 555; Liddell & Scott, s. v. ἀλήτης, B. *not forgetting, careful*, cf. A. I. 2. of per-sons, etc., *truthful, honest*, (not in Hom.); B. Snell, 1978, 94
- (14) M. L. West, 1966, ad loc.
- (15) 『イリアス』第二歌に於いて、トロイア攻略についてのゼウスの約束が *ψείδος* であるか否かが問われている場面がある (B 348–349)。ゼウスはこの約束を、右方向に稲妻を光らせ、「兆しを現す」ことによつて示してゐる (353)。*π*の *σηματε φαίνω* とする表現から、*ψείδος* につながる現象学的な意味を求め、試みが行われてゐるけれども (cf. M. Heidegger, Bd. 54 (Klostermann), 53–55)、『*ψείδος* は兆し』という現象についてではなく、その背後にゐるゼウスの意圖について考えられてゐるのであるから、これは正しくないように思われる。
- (16) この点についての、スネル (1978, 100, n. 15 a) やクリッシャー (1965, 167, n.) の言ひ訳は、『説得力

- を欠いているようである。(cf. A. W. Adkins, 1972, 10)
- (17) 例えば、報告者によってなにかが伝えられる場合、記憶されたものが、正しい意味に於いて忘れられていないものであるためには、記憶されたものが偽りでなく真であることが不可欠であろう。
- (18) ベーターは、*ἀληθείη* の用法がこの三極的構造のみに局限されるように主張している (H. Boeder, 1959, 96-97)。確かに多くの用例は (本文に述べられているように) このような場面で用いられるが、しかしそうでない箇所 (p. 15, σ 342, φ 212) も見られることに注意される必要がある。
- (19) 最初に引用された (1) の用例で、ゴールはスタート地点から「遠く」(*τηλὸθεν* v. 359 cf. v. 452) 隔たっているという表現は注目される。
- (20) アメイス・ヘンツェによれば、*ἦλεις* (v. 486) は歌人を指す (cf. α 10)。しかし、いずれとも大差はない。(Ameis-Hentze, s. v. B. 486)
- (21) 歌人ペミオスは「死すべき者たちを魅惑する歌 (*θελεττιρία*)」を知っている (α 337)。また、オデュッセウスの物語は、歌人の歌の「とく聴く者を魅惑した (*εβελυε*)」と言われる (p. 518-521)。
- (22) cf. G. B. Walsh, 1984, 5-6
- (23) 本稿では、歌人の歌の見事さは、記憶の正確さ、生々しさの意味で理解されている (θ 487-491 や B 484-487 の例を参照)。しかし、優れた歌を歌うことは、新しい事柄の報告というよりは、伝承されたものをより整然と (*κατὰ κόσμον*) 語るという意味での、伝承物語の再解釈であるとする見方がある。これについては、岡道男『ホメロスにおける伝統の継承と創造』(『ホメロスの獨創性』1988, 27-28 参照) θ 489 *κατὰ κόσμον τι*, 'very correctly' (T. B. L. Webster, 1939, 170) のように、本稿では正確に

意味に理解された(但し G. B. Walsh, 1984, 8 f. 参照)。

- (24) その代表的な解釈者としてシロンを挙げる(van Leeuwen (O. Gigon, 1968², 14, 'Hesiod erhält den Aufrag, die Wahrheit zu reden, nicht Falsches zu erfinden, das aussieht wie die Wahrheit und es nicht ist. Das ist der Sinn der Musenrede. Darin weiss sich Hesiod von Homer geschieden. Die Welt der trügerischen Wahrscheinlichkeiten ist die Welt Homers. Dem homerischen Mythos wird die Wahrheit gegenübergestellt. ')。他に H. Diller, 1946, 141; 広川洋一・山崎賞選考委員会『ギリシア思想の生誕』, 1979, 81-82; H. Neitzel, 1980, 387-401 参照。シロンらの解釈に対しては、シエトローの周到な反論がある (W. Stroh, 1976, 85-112)。

- (25) ホメロスの『イリアス』第一歌で、予言者カルカスは「今あること、将来あるであろうこと、以前にあったことに通じつた (*ὅς ἦδ' ἔτα τ' εἴοιρα τὰ τ' ἐσοόμενα πρὸ τ' εἴοιρα*)」(A 70) と言われる。これと『神統記』v. 32 & v. 38 (*τὰ τ' εἴοιρα τὰ τ' ἐσοόμενα πρὸ τ' εἴοιρα*) が対応する(van Leeuwen (1951, 100, n. 118) やコーンフォード (1952, 99-102) は、シオドスに於いて詩人は同時に予言者であると考えた。けれども、*τὰ τ' ἐσοόμενα* を予言と関係させて、後半の *πρὸ τ' εἴοιρα* から切り離して考えるとする) 『神統記』ではなぜ未来については歌われなかったのかという疑問がおぼつた(van Leeuwen (1951, 100, n. 118))。『神統記』ではなぜ未来については歌われなかったのかという疑問がおぼつた(van Leeuwen, 1943, 151-152; *τὰ τ' ἐσοόμενα, ut μάτρει, quo tamen munere nulla carminum suorum parte functum poëtam criminatur Lucianus Disp. cum Hesiodo l. c. et in seqq.*)。

- (26) Hymni Homerici に於ける用例は、ホメロスと余り変わる(van Leeuwen (1951, 100, n. 118))。『神統記』ではなぜ未来については歌われなかったのかという疑問がおぼつた(van Leeuwen, 1943, 151-152; *τὰ τ' ἐσοόμενα, ut μάτρει, quo tamen munere nulla carminum suorum parte functum poëtam criminatur Lucianus Disp. cum Hesiodo l. c. et in seqq.*)。『神統記』ではなぜ未来については歌われなかったのかという疑問がおぼつた(van Leeuwen, 1943, 151-152; *τὰ τ' ἐσοόμενα, ut μάτρει, quo tamen munere nulla carminum suorum parte functum poëtam criminatur Lucianus Disp. cum Hesiodo l. c. et in seqq.*)。『神統記』ではなぜ未来については歌われなかったのかという疑問がおぼつた(van Leeuwen, 1943, 151-152; *τὰ τ' ἐσοόμενα, ut μάτρει, quo tamen munere nulla carminum suorum parte functum poëtam criminatur Lucianus Disp. cum Hesiodo l. c. et in seqq.*)。

参考文献表

(一) 研究

- A. W. H. Adkins, 'Truth, ΚΟΣΜΟΣ, and ΑΡΕΤΗ in the Homeric Poems', *Classical Quarterly*, NS22.1972
- H. Boeder, 'Der frühgriechische Wortgebrauch von Logos und Aletheia', *Archiv für Begriffsgeschichte*, 4, 1959
- F. M. Cornford, *Principium Sapientiae*, 1952
- H. Diller, 'Hesiod und die Anfänge der griechische Philosophie', *Antike und Abendland*, 2, 1946
- E. R. Dodds, *The Greeks and the Irrational*, 1951
- P. Friedländer, *Platon*, 1954², 1964³
- O. Gigon, *Der Ursprung der griechischen Philosophie*, 1968²
- M. Heidegger, *Sein und Zeit*, 1927
- M. Heidegger, *Parmenides*, Bd. 54 (Klostermann)
- E. Heitsch, 'Die nicht-philosophische ΑΛΗΘΕΙΑ', *Hermes*, 90, 1962
- T. Krischer, 'ΕΤΤΜΟΣ und ΑΛΗΘΗΣ', *Philologos*, 109, 1965
- T. Krischer, 'Formale Konventionen der homerischen Epik', *Zetemata*, 56, 1971
- W. Luther, 'Wahrheit, Licht und Erkenntnis in der griechischen Philosophie bis Demokrit', *Archiv für Begriffsgeschichte*, 10, 1966
- H. Netzel, 'Hesiods Iugenden Musen', *Hermes*, 108, 1980
- B. Snell, *Die Entdeckung des Geistes*, 1980⁵

- B. Snell, 'Die Entwicklung des Wahrheitsbegriffs bei den Griechen', *Hypomnemata*, 57, 1978
- W. Ströh, 'Hesiod und die lügende Musen', *Beiträge zur Klassischen Philologie*, 72, 1976
- G. B. Walsh, *The Variety of Enchantment*, 1984
- T. B. L. Webster, 'Greek Theories of Art and Literature down to 400 B. C.', *Classical Quarterly*, 33, 1939
- 岡道男著『ホメロスにおける伝統の継承と創造』(一九八八年)
- 広川洋一十山崎賞選考委員会著『ギリシア思想の生誕』(一九七九年)
- (2) 辞典・注釈
- K. F. Ameis-C. Hentze, *Homers Ilias*, 1930
- E. Boisacq, *Dictionnaire étymologique de la langue grecque*, 1923
- P. Chantraine, *Dictionnaire étymologique de la langue grecque*, 1968
- H. Ebering, *Lexicon Homericum*, 1885
- H. Frisk, *Griechisches Etymologisches Wörterbuch*, 1954
- W. Leaf, *The Iliad I—II*, 1900—2²
- D. J. van Lennep, *Hesiodi Theogonia*, 1843
- H. G. Liddell & R. Scott, *A Greek—English Lexicon*, 1940⁹
- H. J. Mette, *Lexikon des frühgriechischen Epos*, B. Snell und H. Erbse edd., 1955—
- M. L. West, *Hesiod Theogony*, 1966